慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ムスタトゥラフ』のアブー・バクル・トゥライニー伝について
Sub Title	Notes on the biographical description of Abū Bakr al-Ṭuraynī in al-Mustaṭraf
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.331- 345
JaLC DOI	10.14991/005.00000054-0331
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ムスタトゥラフ』のアブー・バクル・トゥライニー伝について

長谷部　史　彦

はじめに

エジプトのマハッラ・クブラー（以下、マハッラ）は、マムルーク朝期（1250－1517）からオスマン朝期（1517－1798）にかけてリネンなどの織物の生産を中心とした手工業都市として成長し、ナイルデルタの一大交易センターとして繁栄した[1]。このガルビーヤ地方の大都市において、15世紀から3世紀以上に亘って地方名家として存続したのがトゥライニー家である。ウラマー・スーフィー・聖者を輩出し続けた同家は、マハッラのバーブ法廷（大法廷）の台帳に記録された会計報告によると、1720年代初頭の時点に至っても年間支出がニスフ銀貨4万枚を超える大規模ワクフを管理し、この都市の社会において強い影響力を保持していた[2]。

トゥライニー家において史料で確認される最古の人物は、マーリク学派の法学者、ザーヒド（禁欲者）で、夢解釈関連の著作も残したウマルSirāj al-Dīn ‘Umar ibn Muḥammad al-Ṭuraynī（1400歿）である。ウマルにはムハンマドShams al-Dīn Muḥammad（1457歿）とアブー・バクルZayn al-Dīn Abū Bakr

1　拙稿「オスマン朝期マハッラ・クブラーの都市構造と社会――シャリーア法廷台帳史料に基づく予備的考察」『史学』78巻3号（2009年）、1－31頁。

2　拙稿「オスマン朝期マハッラ・クブラーのトゥライニー家三施設のワクフ」『史学』80巻4号（2011年）、83－100頁。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号（2023）pp.331-345

（1424歿）という二人の息子がおり、いずれも生前からムスリム聖者として崇敬された[3]。兄のムハンマドは、マムルーク朝のスルターン・ジャクマクの治世（1438-1453）に物価が高騰した1450年11月、マハッラで発生した民衆蜂起の直後に首都カイロに乗り込んでスルターンと交渉し、逮捕された蜂起参加者たち全員の釈放を実現した。彼はシャファーア（執り成し）に長けた「生ける聖者」であった[4]。他方、イブン・タグリー・ビルディー（1470歿）の精選人名録『清澄な泉*al-Manhal al-ṣāfī*』にも伝記が収められ[5]、さらに著名な「生ける聖者」として当時認知されていたのが弟のアブー・バクルであった。イブン・ハジャル（1449歿）の伝記集『隠れた真珠続篇*Dhayl al-durar al-kāmina*』では、彼が「義人（ṣāliḥ, しばしば聖者も指して用いられる語）」・「篤信者」・「真理（神）の助けにおいて立つ者（qā'im fī naṣr al-ḥaqq）」と表現されている[6]。マクリーズィーの伝記集によれば、「聖者（mu'taqad）」のアブー・バクルはマハッラで育ち、禁欲を実践し（tazahhada）、「同地方で試練（miḥan）が起こり、略奪や襲撃が多かった」状況の中で、信心深さから肉食を断ち、自ら栽培するもので最低限の食料を得て、自身の食事と衣服を制限していたという。さらにマクリーズィーは、

3　拙稿「マハッラ・クブラー蜂起の諸相」『オリエント』、46巻2号（2003年）、173－174頁、及び前掲拙稿「トゥライニー家三施設のワクフ」、84頁。マクリーズィーの伝記集『首飾りの真珠*Durar al-'uqūd*』によれば、法学者・禁欲者・篤信者であったウマルは802年第12月18日／1400年8月10日に死去した（Al-Maqrīzī, *Durar al-'uqūd al-farīda fī tarājim al-a'yān al-mufīda*, 4 vols., Beirut: Dār al-Gharb al-Islāmī, 2002［以下、*Durar al-'uqūd*］, vol. 1, p. 143.）。以下、同様に年月日はヒジュラ暦／西暦のかたちで示す。

4　前掲拙稿「マハッラ・クブラー蜂起の諸相」、169頁、及び Fumihiko Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq, the Less Paternalistic Sultan: Some Aspects of Conflict in the Egyptian Cities, 1449 - 52", *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 20-2 (2005), pp. 38-40.

5　Ibn Taghrī Birdī, *al-Manhal al-ṣāfī wa mustawfā ba'da al-wāfī*, 12vols., Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-'Āmma lil-Kitāb , 1984-2004, vol. 12, pp. 299-300.

6　Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Dhayl al-durar al-kāmina*, Cairo: Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya, 1992［以下、*Dhayl al-durar*］, p. 301.

もしも彼が人々から何か物を受け取っていたならば、彼らの彼に対する愛情や彼についての善き信仰から、彼の財産は巨大になっていたことだろう。しかし、彼は現世の装飾や快楽を全て避けていた。

と記し、施しを受けることを潔しとしないこの「生ける聖者」の生活信条を伝えている[7]。また、サハーウィーの名士伝記集『輝く光 *al-Ḍaw' al-lāmi'*』にもアブー・バクルの伝記があり、その大部分はイブン・ハジャルとマクリーズィーの記述に依拠しているが、アブー・バクルがバダウィー Aḥmad al-Badawīとサマンヌーディー 'Umar ibn 'Īsā al-Samannūdīへのズィヤーラ（訪問、参詣）を多く行なっていたと記されている点が注目される[8]。バダウィーについてはタンターの聖廟への参詣を意味しているが、マハッラに近いダミエッタ分流の港サマンヌードに居住したシャーフィイー学派の法学者、禁欲者、奇跡を行う聖者のサマンヌーディーについては、827年／ 1423-1424年に死去した同時代の人物であり[9]、この「生ける聖者」への訪問、換言すれば、「生ける聖者」同士の交流と捉えられよう。

本小論は、イブシーヒーの手になる文学作品『あらゆる優雅な技芸における極上*al-Mustaṭraf fī kull fann mustaẓraf*』（以下、『ムスタトゥラフ』）にみえるトゥライニー家のアブー・バクルに関する評伝記述の検討を試みるものである[10]。後述のようにイブシーヒーはアブー・バクルを師と仰ぎ、親しく交流する日々を過ごし、弟子の視点からこの尊師について『ムスタトゥラフ』に細かい記述を残した。しかし、当該記述の内容に関する踏み込んだ考察はこれまでに為されていない。以下では、『ムスタトゥラフ』とその著者についてまず概要を示し、続いて当該記述の試訳を提示したうえで、その史料と

---

7 *Durar al-'uqūd*, vol. 1, p. 143.

8 Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi' fī a'yān al-qarn al-tāsi'*, 12vols., Cairo: Maktabat al-Qudsī, 1934-1936［以下、*al-Ḍaw' al-lāmi'*と略記］, vol. 11, p. 58.

9 *al-Ḍaw' al-lāmi'*, vol. 6, p. 102.

10 2018年に公表されたKelly Tuttle, "al-Ibshīhī, Bahā' al-Dīn", *Encyclopaedia of Islam, Three*が『ムスタトゥラフ』にアブー・バクルに関する記述があることを筆者に教示してくれた。

しての特徴や重要性について考えてみたい。

Ⅰ　イブシーヒーと『ムスタトゥラフ』

サハーウィーの『輝く光』によれば、イブシーヒー Bahā' al-Dīn Abū al-Fatḥ Muḥammad ibn Aḥmad ibn Manṣūr al-Ibshīhīは、790年／1388年にマハッラの西南西約10キロメートルに位置するイブシャワーイ・アル＝マラク Ibshawāy al-Malaq村に生まれた[11]。イブシーヒーは10歳でクルアーンの全章暗唱に到り、高等教育へと進み、ナフラーリーヤal-Naḥrāriyyaに住むタルヤーウィー al-Shihāb al-Talyāwīやその他の学者の前で、ガザーリー（1111歿）のシャーフィイー学派実定法学書『簡約*al-Wajīz*』のタブリーズィー（1224歿）による要約書（mukhtaṣar）と、『マカーマート』の作者として知られるハリーリー（1122歿）が著した文法書『語尾変化の名言*Mulḥat al-i'rāb*』のアルド（披露）を行なったという[12]。イブシーヒーがマハッラの南西約20キロメートルの地点にあるナフラーリーヤ村に居住したかどうかは不明だが、少なくともこのガルビーヤ地方の村に滞在した経験があったとみてよかろう。そして、彼は814年／1412年にハッジ巡礼を実行し、また一度ならずカイロに行き、そこでジャラールッディーン・ブルキーニー al-Jalāl al-Bulqīnī（1421

11　*al-Ḍaw' al-lāmi'*, vol. 7, p. 109. 生誕地について、サハーウィーは「イブシャワイフ Ibshawayh」とのみ記している。K・タトルはこれを「ファイユームまたはガルビーヤ地方の村」とし（Tuttle, "al-Ibshīhī, Bahā' al-Dīn".）、『ムスタトゥラフ』の第73章の内容を検討して女性表象について論じたM・カッサリーノは「ファイユームの村」としているが（Mirella Cassarino, "Between Function and Fiction: The Representation of Women in al-Ibshīhī's *Mustaṭraf*", *Mamlūk Studies Review*, vol. 21 (2018), p. 1.）、エジプト中部のファイユームのイブシャワーイではなく、マハッラの周辺村落であるイブシャワーイ・アル＝マラクとみるのが妥当であろう。アラブ文学研究者のT・ヘルツォークも「ガルビーヤ地方のイブシャワーイ」としている（Thomas Herzog, "Composition and Worldview of Some *Bourgeois* and *Petit-Bourgeois* Mamluk *Adab*-Encyclopedias", *Mamlūk Studies Review*, vol. 17 (2013), p. 109.）。

12　*al-Ḍaw' al-lāmi'*, vol. 7, p. 109.

歿）の講義にも参加した[13]。

彼の父アフマドはマハッラでモスクの説教師職（khiṭāba）に着いていたが、その死去に伴ってイブシーヒーが同職を継承した。サハーウィーはまた、833年／1429－1430年にビカーイーal-Biqāʻīとイブン・ファフドIbn Fahdがマハッラにおいてイブシーヒーに面会したと記しており、当時イブシーヒーが同地に住んでいたことが確認される[14]。

サハーウィーはイブシーヒーの歿年について、この伝記記述の掉尾に「彼はウスターダールの弟（兄）の殺害に近い、［8］50年より後に死去した」と記している[15]。マムルーク朝の現職ウスターダールの異母弟（兄）であったアフマドがその圧政に憤るマハッラ住民に殺害されたのは、854年第9月25日／1450年11月1日のことであった[16]。ヒジュラ暦850年は西暦1446年3月29日に始まったから、イブシーヒーが死去したのは西暦1446年～1450年の間、さらに絞れば1449年、或いは1450年あたりとみてよいのではないか。歿年が1446年頃[17]、或いは1446年以降[18]とされてきたのは、サハーウィーが説明なく唐突に言及した「ウスターダールの弟（兄）の殺害」の含意がこれまで汲み

---

13 *al-Ḍaw' al-lāmiʻ*, vol. 7, p. 109. 後期マムルーク朝の代表的なウラマー名家のブルキーニー家とジャラールッディーンについては、伊藤隆郎「14世紀末－16世紀初頭エジプトの大カーディーとその有力家系」『史林』79巻3号（1996年）、17－28頁を参照せよ。

14 *al-Ḍaw' al-lāmiʻ*, vol. 7, p. 109. このイブン・ファフドは、カイロ留学の経験があるメッカ年代記『人間の贈呈*Itḥāf al-warā*』の作者ナジュムッディーン・ウマル（1409－1480）であろう。ファフド家については、太田啓子「14－16世紀メッカのウラマー――ファフド家の事例から」『お茶の水史学』62号（2019年）、173－187頁、及びJohn Lash Meloy, "Ibn Fahd", *Encyclopaedia of Islam*, *Three*を、ビカーイー（1407－1480）については、ひとまずWalid Saleh, "al-Biqāʻī", *Encyclopaedia of Islam*, *Three*を参照のこと。

15 *al-Ḍaw' al-lāmiʻ*, vol. 7, p. 109.

16 拙稿「マハッラ・クブラー蜂起の諸相」、165－167頁。

17 Cassarino, "Between Function and Fiction", p. 1; Geert Jan Van Gelder, *The Classical Arabic Literature: A Library of Arabic Literature Anthology*, New York: New York University Press, 2012, p. 305.

18 Herzog, "Composition and Worldview", p. 109.

取れていなかったからであり、ここで上記の修正案を提示しておきたい。

ヘルツォークはイブシーヒーについて、一定の学識をもつ「小ウラマー」だったが「マムルーク帝国の知的エリート」ではなかったとし、『ムスタトゥラフ』については、マハッラの名士たちのような読者を対象として書かれ、「随想集（anthology）」というよりは、ある程度の財産を有する商人や職人などの都市中間層の心性を反映した「教養大全（*adab*-encyclopedia）」の一種とみている[19]。さらにヘルツォークの所論によれば、1999年のベイルート版で1547頁にも及ぶ大著である『ムスタトゥラフ』全84章は、厳格な構成をもたないが、内容的に大別して最初から順に、〈1〉イスラームの五行と理性（‘aql）・知能（dhakā’）・学問（‘ilm）・教養（adab）など〈第1章－第5章、全体の約4％の記述量〉、〈2〉金言・諺・修辞法（balāgha）・アラビア語の正則性（faṣāḥa）・詩・沈黙の重要性など〈第5章－第13章、約12％〉、〈3〉統治〈第14章－第21章、約5％〉、〈4〉倫理（akhlāq）〈第22章－第44章、約27％〉、〈5〉人生の喜び〈第45章－第76章、約45％〉、〈6〉人生の不幸〈第77章－第84章、約7％〉という全6部から成っている[20]。このうち、〈4〉と〈5〉を合わせると全体の4分の3近くの分量を占めており、「倫理」と「人生の喜び」が本書の二大テーマといってよいだろう。

Ⅱ　アブー・バクル・トゥライニーに関する記述の試訳

イブシーヒーは、『ムスタトゥラフ』の上記の全6部のうち、倫理に関する〈4〉に含まれる第31章「善行（khayr）と正義（ṣalāḥ）、教友たち（ṣaḥāba）の記述、聖者たち（awliyā’）や義人たち（ṣāliḥīn）の記述について」の結尾に、恩師アブー・バクル・トゥライニーに関する長めの記事を配している。弟子の立場で書かれたこの伝記記述を逐語訳すれば、以下のとおりである[21]。

19　Herzog, “Composition and Worldview”, pp. 109-110, 115, 123-127.

20　Herzog, “Composition and Worldview”, pp. 110-112.

21　Al-Ibshīhī, *al-Mustaṭraf fī kull fann mustaẓraf*, 3vols., Beirut: Dār Ṣādir, 1999, vol. 1, pp.

私が親しく接し、その親交（ṣuḥba）から助けを得て、その恩寵（baraka）によって私に善事（khayrāt）が充溢することとなった人物の一人に、我がサイイド（sayyidī）、導師（shaykh）、礼拝指導者（imām）、学者、勤労者、高潔の父、誠実の父である、マーリク学派のアブー・バクル・トゥライニー Abū Bakr ibn ‘Umar al-Ṭuraynī al-Mālikī がいる。アッラーが彼の心深くに秘めた思いと魂を神聖なものとされ、彼の墓（ḍarīḥ）を照らされますように！ 彼は禁欲（zuhd）と敬神（wara‘）においてその時代で唯一無二の存在であり、過誤（ḍalāl）と逸脱（bida‘）の人々に対する抑制者（qāmi‘）であった。彼には明らかな神秘（asrār）と絶え間ない恩寵（barakāt）があり、非アラブ（‘ajam）もアラブも、人々は彼の指示に従った。そして、彼の評判は東西の諸国に広がり、諸王（mulūk）が彼の門に来訪し、彼の信者（aṣḥāb）であることを選択した。アッラーが悲しみを追い払って下さることがなければ、悲しい者が彼のもとに来ることはなかったし、アッラーが願いを叶えて下さることがなければ、願いの対象を希求する者もいなかったのであるが。

彼は義務以上の行為を保ち、また、義務を続けていた。そして、彼は土地の植物のうち［イスラーム法で］許容された（mubāḥ）食品を多く摂り、現世において美味な食物や飲物で自らを楽しませることをしなかった。それどころか、彼は一度、自らに対し怒って、水を飲むことを何か月も自身に禁じたという。そして、彼には――アッラーが彼に満足されますように！――彼の信者たちへの同情と思いやりが多くあった。彼の敵であれ味方であれ、アッラーのあらゆる被造物に対して誠実であり、彼のもとに最悪の敵が来ても喜悦と慈愛をもって献身していた。そうして、最悪の敵は、彼にとって最も好ましい人として彼のもとを離れるのである。ある人が次のように述べたように。

そして、私はその男に出会った。私は知っている、

451-453. なお、筆者による補足を［ ］内に、アラビア語の原語のローマ字転写を（ ）内に示すこととする。

その男が敵であり、内に怨恨が隠れていることを。
そこで、彼は男に自らの喜びを与えた。すると、男の心は戻る、
健全に。彼のもとで怨恨が死んでしまったから[22]。

同時代の人々による彼への攻撃があったが、いかなる場合でも彼らの諸力は彼に起因するものであった。私は彼がこのような詩行を引用するのをしばしば耳にした。

私が害悪を与えなければ、彼らが私に害悪を及ぼすことはなかった。
私は愛する者なのだから。愛する者は苦難に耐えられる[23]。

そして、彼は――アッラーが彼に満足されますように！――思いやりに溢れ、他者の願いを充たすことについて偉大であり、その性格は温和で慎み深く、ムスリムの不可侵のものを犯すことなく、ムスリムに不名誉を与えることもなかった。あることについて彼に相談すると、彼は必ず善事へと導き、誠実に忠告した。

私は彼と――アッラーが彼に満足されますように！――約 15 年間親しく交流した（ṣaḥibtu-hu）が、その心地よさから、それはまるで 1 年であったかのようであった。彼の恵与（birr）は 1 日も私に途切れることがなく、私は彼には私よりも親密な人はいないとまで思うほどであったが、それはあらゆる彼の信者たち（aṣḥāb-hu）と共にある彼の行動で

22　ウマイヤ朝期イラクの詩人ミスキーン・ダーリミー Miskīn al-Dārimīの詩。『ムスタトゥラフ』の重要な情報源の一つである、アッバース朝官僚・文人のイブン・ハムドゥーンBahā' al-Dīn Muḥammad ibn al-Ḥasan ibn 'Alī ibn Ḥamdūn（1102-1166）の随想集『ハムドゥーンの覚書*al-Tadhkira al-Ḥamdūniyya*』からの引用とみられる（Ibn Ḥamdūn, *al-Tadhkira al-Ḥamdūniyya*, 10vols., Beirut: Dār al-Ṣādir, 1996, vol. 2, p. 188.）。

23　出典不明。また、サハーウィーもアブー・バクルが引用していたとしてこの詩行を引いているが、典拠を示していない（*al-Ḍaw' al-lāmi'*, vol. 11, p. 58.）。おそらくそれは『ムスタトゥラフ』からの転載であろう。

あった。アッラーが復活に際して彼の顔を喜びの表情とされますように！ そして、彼の主の恵み深さから、彼の願うものが彼に届きますように！

彼は――アッラーが彼に満足されますように！――イマーム・マーリクの法学派の法学者で、似た者や同様の者が同時代に見られない、偉大なるイマームであった。彼には真実在（ḥaqīqa）の知についての言明があり、我々は神の知識の開示（mukāshafa）と神が齎す心的状態（aḥwāl）を彼に何度見たことだろう。そして、もし私が彼の美徳（manāqib）を辿ったとしても言葉で表せないが、私に言えるのは、彼がその時代で唯一無二であったということである。

彼は――アッラーが彼に満足されますように！――60 数年生きた。そして、彼の時代に人々は満足な暮らしと善き力の中にあった[24]。しかし、彼には――アッラーが彼に満足されますように！――病気や体調不良が多く、晩年には約 1 年間酷く衰弱し、［ヒジュラ暦 827 年］第 12 月上旬に彼の病状は進み、［同月］11 日の夜にその状態が激しくなり、危篤となって回復することなくその夜の三分の一まで至り、彼は――アッラーが彼に満足されますように！――827 年第 12 月 11 日［／西暦 1424 年 11 月 4 日］の金曜日の夜、幸福に、賞賛されつつ死去した。そして、人々に彼の訃報が届いた時、イスラーム教徒たちにとってその衝撃は大きく、諸国の各地に慟哭と悲嘆と哀悼の意が生じた。キリスト教徒たちや彼ら以外の、イスラーム教徒共同体と相容れぬ者たちの諸集団でさえもそうであり、彼との別れに彼らは泣き、悲しみ、哀悼したのである。彼はその時代のイマーム、当世の碩学であったから、どうしてそうでないことがあっただろうか。それについての作者の言葉は当を得ていた[25]。

24　マハッラに住むイブシーヒーのこの時代認識は、前述のように当該期の同地方の「試練」を強調するカイロ在住のマクリーズィーの悲観的な見解と対照をなしている。

25　ファーティマ朝第4代君主ムイッズの宮廷詩人でセビーリャ生まれのイブン・ハーニウ・アンダルスィー Muḥammad ibn Hāni’ ibn Sa‘dūn al-Andalusī（973歿？）の詩。

時代は誓った、彼と同じような者を連れて来ると。

時代よ、汝の誓いは果たされなかった。よって、罪滅ぼしせよ。

アッラーが彼に、そして彼によって我らに満足され、信仰と現世と来世における彼の恩寵をもって我らを助けてくださいますように！そこで、人々は彼の葬儀の準備をし、湯灌をした。私も彼の湯灌に立ち会った者の一人であった。しかし、彼の喪失によって私たちに齎された不幸から、その時の私は心ここにあらずであったのだが、どうしてそうでないことがあっただろう。彼は思いやりがあり、敬虔で慈善の心に富み、慈愛に満ちた父親であった。そして、湯灌が終わると、――アッラーが彼に満足されますように！――法官たち（quḍāt）と副法官たち（nuwwāb）、灌漑監察官たち（kushshāf）、地方総督たち（wulāt）が来て、彼を彼らの頸に乗せて運び、説教の行なわれるマハッラの集会モスクまで進んだが、彼らと共にある彼の偉大さに対してそのモスクは手狭であり、また人々の多さから道々（al-shawāri‘ wa al-sikak wa al-ṭuruqāt）も狭く、それよりも多い群衆はみられないほどであった。そして、その日以来、私が涙を多く流すことはないが、これは、彼がその時代の人々のクトゥブ（quṭb、枢軸）であったことを示している。イマームのアフマド・ブン・ハンバルは、――アッラーが彼に満足されますように！――「我らと彼らの間には葬儀（janā’iz）がある」と言ったが、それよって人々の結集について語ろうとしたのである[26]。アッラーは最もよ

26　ハンバル学派の名祖イブン・ハンバル（780-855）のこの発言は、スラミー Abū ‘Abd al-Raḥmān Muḥammad ibn al-Ḥusayn al-Sulamī al-Naysābūrī（1021歿）が、恩師でバグダードのシャーフィイー派法学者のダーラクトゥニー Abū Ḥasan ‘Alī ibn ‘Umar al-Dāraquṭnī（995歿）への質問とそれに対する回答をまとめた『スラミーのダーラクトゥニーに対する質問集*Su’ālāt al-Sulamī li-al-Dāraquṭnī*』に記されている。ダーラクトゥニーはアブー・アリー Abū ‘Alī al-Ṣawwāfから、イブン・ハンバルの子がアブー・アリーに述べた情報を伝え聞いた。それによれば、イブン・ハンバルは「逸脱の人々（ahl al-bida‘）に対して『我らとお前たちとの間には

く知り給う。そして、彼の棺は彼らの頸の上に持ちあげられ、彼の導師（shaykh-hu）で至高なるアッラーを知る者（‘ārif bi-llāh ta‘ālā）、スライマーン・ダワーヒリー Sayyidī Sulaymān al-Dawākhilī が――アッラーが彼の恩寵をもって我らを助けられますように！――［葬儀の］礼拝を先導した。

そして、彼は金曜日に、彼の父親で導師、礼拝指導者、学者、碩学、イスラーム教徒たちの法勧告提示者（muftī al-muslimīn）のウマル Sirāj al-Dīn Abū al-Ḥafṣ ‘Umar al-Ṭuraynī al-Mālikī と共にあるかたちで、彼がサンディファーに設立した彼の修道場（zāwiya）[27] にある一つの墓に埋葬された。アッラーが彼の恩寵をもって我らを助けられますように！ そして、楽園（janna）を彼の近くにあるもの、彼の住処となされ、我々と彼を、過去の人々と後世の人々の主人、預言者たちの封印、イスラーム教徒たちの中で最も優れた人であるムハンマド――アッラーが彼と彼の家族と彼の教友たちの全てに祝福を与えられますように！――の一団へと集めてくださいますように！ また、我らはアッラーに、我らに対する恩恵と援助、そして彼の兄である我らがサイイド、我らの主人、導師のムハンマド・トゥライニー Shams al-Dīn Muḥammad al-Ṭuraynī の存続が長きことをもって、イスラーム教徒たちを喜ばせ給うよう求め奉る。アッラーがイスラーム教徒たちのために彼の日々を永続させられますように！そして、ムハンマドと彼の家族と彼の教友たちの全てに祝福を与えられますように！

葬儀の日（yawm al-janā’iz）がある』と言え」と語ったという（Al-Sulamī, *Su’ālāt al-Sulamī lil-Dāraquṭnī*, al-Riyāḍ: Khālid b. ‘Abd al-Raḥmān al-Jarīsī, 1427/2006, p. 361.）。そこでの「我ら」は「スンナの人々（預言者ムハンマドの言行に従う人々）」であり、葬儀にはスンナに従う人々のみならずスンナからの逸脱者たちも参集すべきである、という言説と理解されよう。

27 マハッラのサンディファー区域のトゥライニー小市場地区にあるサーダ・トゥライニーヤ修道場。トゥライニー家の中心拠点であるこの宗教施設については、拙稿「トゥライニー家三施設のワクフ」を参照されたい。

Ⅲ　当該記述の特徴と独創性

以上、訳出した『ムスタトゥラフ』のアブー・バクル・トゥライニー伝には、イブン・ハジャル、マクリーズィーなどの同時代諸史料に比べて、より詳細かつ独自の記述が少なからず内包され、また、その記述量も抜群に多い。以下では大きく三点にまとめるかたちで記述内容を吟味し、史料としての特徴や価値について考えてみたい。

1）アブー・バクルとイブシーヒーの師弟関係

イブシーヒーは、前述のとおりガルビーヤ地方のイブシャワーイ・アル＝マラクに生まれ、聖地メッカ、カイロ、ナフラーリーヤにおそらくは短期間滞在したが、生涯の大部分はマハッラで過ごしたとみられる。『ムスタトゥラフ』の記述からは、少なくともアブー・バクルの死去した1424年までの約15年間、1409年頃から1424年まで、つまりイブシーヒーが21歳頃から36歳頃まで、マハッラでこの聖者と密に交流していたことが確認される。イブン・ハジャルは、アブー・バクルに「多くの追随者たち（atbāʿ）や弟子たち（murīdīn）がいた」と記しているが[28]、イブシーヒーはそうした弟子たちの一人であった。トゥライニー家の聖者アブー・バクルは、後代に広範な読者を得ることになる教養大全『ムスタトゥラフ』の著者を弟子として指導していたのである。

両者の師弟関係は良好で、それは、弟子のイブシーヒーをして「約十五年間親しく交流したが、その心地よさから、それはまるで一年であったかのようであった」と述懐させるほどに安楽であった。そして、イブシーヒーは早く過ぎたと思い返しているが、彼にとって掛け替えのない年月であったことが文章から確かに伝わってくる。また、アブー・バクルの葬儀の記述の中で、「彼は思いやりがあり、敬虔で慈善の心に富み、慈愛に満ちた父親であった」とあるように、父子的な関係が育まれていたことも窺える。こうし

28　*Dhayl al-durar*, p. 301.

た師弟の関係や交流をめぐる記述の全てが『ムスタトゥラフ』特有のものであり、貴重な価値をもつといえよう。

2）スーフィー聖者のアブー・バクルとその信者たち

マクリーズィーも指摘するアブー・バクルの禁欲者としての側面が、『ムスタトゥラフ』においては一段と強調され、「禁欲と敬神においてその時代で唯一無二の存在」とまで表現されている。特に飲食の面については、マクリーズィーの指摘とも重なる菜食主義への言及に加え、「現世において美味な食物や飲物で自らを楽しませることをしなかった」とあり、さらに「自らに対し怒って、水を飲むことを何か月も自身に禁じた」という聊か度の過ぎた禁欲実践も記録されている。また、マーリク学派の法学者であったアブー・バクルのスーフィー聖者としての側面については、イブシーヒーを含む人々に対してアブー・バクルが「神の知識の開示」や「神が齎す心的状態」を幾度も示し、「絶え間ない恩寵」、即ち唯一神に由来する特別な霊力を人々に与える聖者として記述されている。さらに、イブシーヒーがアブー・バクルを「その時代の人々のクトゥブ」と言明し、聖者のヒエラルヒーの頂点的存在として位置付けている点は刮目に値する。

また、アブー・バクルが敵味方の別なく献身的に接し、「アッラーのあらゆる被造物に対して誠実」であり、敵対的人物の来訪に際しても「喜悦と慈愛をもって献身し」、友好的な関係へと変化させる力を備えていたという独自の指摘もなされている。そして、「諸王」までがアブー・バクルへの訪問（ズィヤーラ）を通じて信者となり、またその葬儀に際しては、大群衆の参列に加えて、法官・灌漑監督官・地方総督などマムルーク朝の地方支配体制の重職保持者も率先して棺を担ぐほどの信奉ぶりであったことが、著者の参与観察に基づき述べられている。当該部分でとりわけ印象深いのは、「彼には私よりも親密な人はいないとまで私が思うほどであったが、それはあらゆる彼の信者たちと共にある彼の行動であった」という記述である。そこには、師との個人的関係の特別視と相対化の間で揺れる弟子イブシーヒーの心情が表現されているように思われる。

3）アブー・バクルの病・死・葬儀・埋葬

アブー・バクルの最期に関する詳述も弟子イブシーヒーならではのものである。「病気や体調不良が多く、最後には一年間酷く衰弱し」ていたことが記され、そこから危篤になり、死に至る過程が細かく述べられている。イブシーヒーの記す歿年月日は、マクリーズィーの伝記集やイブン・ハジャルの年代記の記述[29]と一致する。享年60数歳であったとする『ムスタトゥラフ』の記述に従えば[30]、アブー・バクルの生誕は1360年代はじめあたりということになる。「彼の喪失によって私たちに齎された不幸から、その時の私は心ここにあらずであった。」という一文は、湯灌に立ち会ったイブシーヒーの茫然自失の状態を如実に伝えている。

そして、「キリスト教徒たちや彼ら以外の、イスラーム教徒共同体と相容れぬ者たちの諸集団でさえもそうであり、彼との別れに彼らは泣き、悲しみ、哀悼した」という記述にも注意を払いたい。「キリスト教徒たち」についていえば、マハッラとサンディファーはコプト教会にとっても重要な町であり[31]、このムスリム聖者の訃報にこの地域のコプト教会信徒たちも動揺し、哀悼したということになる。弟子による記述の誇大化についての注意も必要ではあるが、エジプトの地方における聖者信仰のシンクレティズム的な実態を伝える記述と捉えられる一文である。

さらに、葬儀と埋葬に関する情報の細かさも『ムスタトゥラフ』の特長といえる。特に注意すべきは、葬儀礼拝のイマームとして言及されているスライマーン・ダワーヒリーである。マハッラの住人であったと思われるこの人物に関する情報を他の諸史料に見出すことができないが、「彼の導師で至高

---

29 Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, *Inbā’ al-ghumr bi-anbā’ al-‘umr*［以下、*Inbā’ al-ghumr*］, 4vols., Cairo: Lajnat al-Iḥyā’ al-Turāth al-Islāmī, 1969-1998, vol. 3, pp. 332-333.

30 イブン・ハジャルも死亡時に60歳を超えていたとしている（*Inbā’ al-ghumr*, p. 333）。

31 13世紀にコプト主教座が設置されたマハッラ、及びこれに隣接するサンディファーの台頭については、辻明日香「11世紀後半－14世紀下エジプトにおけるキリスト教徒集落の消長」『日本中東学会年報』、31巻2号（2015年）、44頁を参照のこと。

なるアッラーを知る者」とあるため、アブー・バクルを指導したスーフィー聖者であったと考えられる。つまり、アブー・バクルにとってのスーフィズムの師の個人名がこの記述で初めて確認されるのである。また、サーダ・トゥライニーヤ修道場の同家の墓に父ウマルの次に埋葬されたとの情報は他史料でも確認されるが、この父がムフティー（法勧告提示者）であったとの言及は『ムスタトゥラフ』独自の情報である。

おわりに

『ムスタトゥラフ』のアブー・バクルの評伝は、その兄であるムハンマドの長生を祈るかたちで結ばれている。それは、アブー・バクル亡き後、『ムスタトゥラフ』のアブー・バクル伝の部分を執筆していた頃のイブシーヒーが、恩師の兄に対する信頼や崇敬を強めていたことを示しているのかもしれない。

以上、本小論では『ムスタトゥラフ』のトゥライニー家研究における有用性を中心に論じたが、この教養大全の所々に含まれるイブシーヒーの体験や見聞に関する記述の中には、チェルケス・マムルーク朝（1382－1517）前期のエジプト、特にマハッラを中心としたガルビーヤ地方の社会史研究に裨益するものがこれ以外にも少なからずあると期待される。それらの精査と検討は今後の課題としたい。